

# 福岡工業大学 学術機関リポジトリ

## 教養教育におけるサービス・ラーニングの実践報告 —2023

### 年度「地域創生論」「地域創生PBL」の現状と課題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 福岡工業大学教育開発推進機構 公開日: 2024-09-05 キーワード (Ja): 地域連携学習, サービス・ラーニング, リフレクション, 学習効果, コーディネーション キーワード (En): 作成者: 坂本 文子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11478/0002000108">http://hdl.handle.net/11478/0002000108</a>

# 教養教育におけるサービス・ラーニングの実践報告

## —2023年度「地域創生論」「地域創生 PBL」の現状と課題—

坂本文子 (教養力育成センター)

Fumiko Sakamoto (Center for Liberal Arts)

**Key words:** 地域連携学習, サービス・ラーニング, リフレクション, 学習効果, コーディネーション

### 1. はじめに

福岡工業大学教養力育成センターは、2023年度より教養選択科目として「地域創生論」および「地域創生 PBL」を新たに開講した。それまで開講されていた「地域創生入門」の拡充である。いずれの科目も自治体、企業、NPO等団体などと連携して、地域に根差した問題に目を向け、その問題に対して具体的な解決を図ることを通して学ぶ点で共通する。

本論は、筆者が担当したこれらの科目の開講 1 年目の実践報告として、各科目や科目間の特色の整理および、学生の学びに対する効果やコミュニティ・エンゲージメントについて現状と課題を整理する。これにより、今後の教養科目における地域連携学習の意義や教育効果の検討につなげるものである。

### 2. サービス・ラーニングと授業科目の位置づけ

本論が対象とする“地域創生”を付した科目は、地方創生を背景に、より創造的な思考と実践的な力を養おうとする目的をもった科目である。地域共創や地域協働などの表現で、全国の大学でも地域と連携した学びを強化しようとする動きは高まっている。一般に、これらは地域に根差した課題をテーマに実践的に学ぶ点では共通するが、その特徴や詳細は組織の方針や担当する教員の専門性に拠るところが大きい。

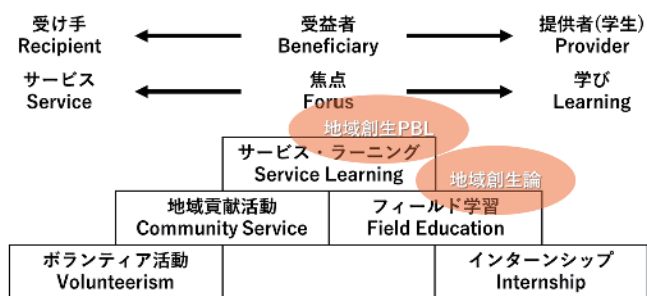
こうした状況を踏まえ、学生の学習効果を高める上では各科目および科目間の体系的な整理が必

要であることから、筆者はまず、これら新科目間の差別化と統合を図ることを試みた。教養教育における学生の学びや成長の増進を期待できるだけでなく、専門教育との接続も視野に入れた授業設計に有効な概念として、サービス・ラーニングに基づき整理を行うこととした。

サービス・ラーニングの定義は一様でないが、学生の学びと社会貢献を図る教育法として日本でも広く知られるようになり、その特徴はリフレクションと互惠性(Reciprocity)にある(Jacoby, 1996 = 2007)。ここでは「市民性の涵養と専門的知識の深い理解や応用の習得をねらいとし、社会貢献活動と学問的な知識・技能の構造的な統合かつ、地域社会が抱える問題の解決を目指すような公益的・実践的活動が、カリキュラムとして構造的に提供される教授法」(坂本, 2020)と定義する。

この定義に基づき「地域創生論」は、社会背景や地域を読み・解くための知識と技法の獲得を中心に据えた内容とし、大学周辺にある地縁組織の協力を得ながらフィールドに出る体験をしてもらうこととした。これに対し、「地域創生 PBL」は、特定の地域と連携し、フィールドワークを中心に据えた。連携先となる地域パートナーが抱える課題を学生と共有してもらい、学生が具体的な解決策を地域パートナーや住民に向けて返すことをゴールとした。

図 1 は Furco (1996) が示したサービス・ラーニングの整理とこれらの科目の位置づけを示したものである。



Furco (1996) を基に筆者作成

図 1 サービス・ラーニングと科目の位置づけ

### 3. 「地域創生論」における実践

「地域創生論」は、前期 5 クラス、後期 1 クラスが開講された。対象は、全学部学科で、学年は新規開講科目のため 1 年生に限られた。履修者は前期全 161 名、後期 55 名だった。

#### 3.1 授業の主な構成

授業の構成は、全 15 回の内、6 回を「知識を学ぶ」時間、6 回を「実践的に学ぶ」時間、3 回を「知識と実践をつなげて学ぶ」時間に充てた。

「知識を学ぶ」時間では、AL を取り入れた座学で、地域を読み・解くための基礎知識を養うことに重点を置いた。「実践的に学ぶ時間」では、事例紹介や自ら調べた事例の分析、大学周辺にある公民館または地域交流センターを見学し、関係者から取組や地域活動の様子について話を聞いた。その後、「福工大周辺地域の資源と魅力」(前期)や「地域住民に根差した公民館における活動アイデア」(後期)をテーマに、5~6 名のグループに分かれて、実際に大学周辺を歩いてもらった。

この他、全クラス合同で、地域創生に関わる取組や課題について実践者から話を聞く機会を設けた。ゲスト講師は、地域共創のハブとして取り組んでいる福津市未来共創センター(前期)やまちづくりの総合デザインを手掛けるピノー株式会社(後期)の方を招聘した。

#### 3.2 成果とコミュニティ・エンゲージメント

最終成果について、先に述べた各テーマで、地域を観察して気づいた魅力の活用方法や気づいた課題に対する解決策を考えてもらい、各グループで A3 用紙 1 枚のポスターを作成してもらった。発表内容には、①見つけた地域資源とその魅力、②地域活性化への活用アイデア、③感想の 3 項目を盛り込むよう事前に指示をだした。

作成したポスターを用いて、クラス内で学生同士のプレゼンテーションと相互評価を行った。終了後、前期はキャンパス内にある掲示板に、後期は対象とした公民館の特設掲示板にポスターを掲示し、地域の方や学内教職員に投票を呼び掛けた。特定の地域(住民)と関わる機会が少ない授業設計においても、学生自らの取組が地域社会と繋がっていること、そして学生を取り巻く人々もまた学生にとっての共同教育者(Co-educator)であること、これらを示し関係を築くことが目的である。

評価は、①論理性(説得力をもって伝わる内容になっているか)、②具体性(実現可能性を考慮した内容になっているか)、③独創性(独自の観点から地域に共創を生み出そうとしているか)の 3 点で行ってもらい、最も優れているポスターに 1 票を投じてもらった。その結果、得点の多かった上位 3 グループの発表タイトルは下記の通りである。

##### 【前期】

- 1 位 「和菓子と地域の関係」(27 票)
- 2 位 「エコステーションの活性化」(21 票)
- 3 位 「メガセントラライアル新宮店の地域連携と発展」(17 票)

##### 【後期】

- 1 位 「秋祭り×国際交流」(15 票)
- 2 位 「農業から広がる魅力(新しい多世代交流の形)」(13 票)
- 3 位 「グランドゴルフで繋がる地域の輪」(11 票)



図 2 学内掲示の様子



図 3 公民館掲示の様子

### 3.3 学習効果の現状

学生の学習効果に関して観察された様子として、まず、まちづくりのステークホルダーになり得る地縁組織等の知識を事前に得ていたが、実際にゲスト講師から話を聞いたり、フィールドワークを行った際に、それらの知識と目の前の事実をすぐに結びつけて理解できない様子がみられた。

次に、大学周辺のフィールドワークでは、近隣の商店主と SNS を交換するほどの交流をもったグループや、聞き取りをしようとした飲食店で無料で飲食させてもらったグループもあり、学生は対象エリアの人々に対して想定以上に積極的なコミュニケーションを図っていた。さらに、授業時間外に自主的に飲食店を訪れ取材してくるグループや、公民館で聞き取りをしにくるグループもあり、学習意欲の高まりが感じられた。

地域資源について、大学周辺に「何もなかった」と捉えたグループが大学周辺の暗い坂だらけの地形を活かして灯籠で明るくしてイベント化を図ろうとしたり、公園が避難場所になっていることに気づいたグループが日頃から公園でできるスポーツを通して大学生と顔見知りになることで災害時に役立つと考えたりしていた。その他、高齢者もファストフードを利用しやすくし、店内を地域交流の場にする提案や、幹線道路沿いの超大型ディスカウントストアの駐車場で子育て世代のコミュニティ形成を目的としたマルシェを開催する提案など、一般に地域コミュニティとの関りが薄い地域資源に着目するグループもあった。

これらの成果をまとめたポスターを見た教職員からは「(本学の) 学生たちにこのような行動力が

あると思わなかった」という感想も聞かれた。

## 4. 「地域創生 PBL」における実践

「地域創生 PBL」は、後期 2 クラスが開講され、対象は全学部学科の 1 年生から 4 年生だった。ここでは仮に A クラスと B クラスとする。A クラスは教員 1 名、学生クラス・サポーター 2 名、B クラスは教員 2 名、学生クラス・サポーター 3 名で実施された。A クラスの履修者は 9 名(1 年生 7 名、2 年生 1 名、3 年生 1 名)で、篠栗町福祉課と連携し、篠栗町の高齢者ができる限り介護を受けずに元気に過ごすための地域デザインの提案を目指して取り組んだ。B クラスの履修者は 23 名で全員 1 年生だった。古賀市、西日本新聞社、株式会社明治、福岡県醤油醸造協同組合、福岡工業大学による連携プロジェクト「古賀式私の朝プロジェクト」(以下、朝活 PJ) と連携し、古賀市民の健康を守ることを目的に、バランスの取れた朝食をとる人が増えるための地域デザインの提案を目指して取り組んだ。

### 4.1 授業の主な構成

A クラス、B クラス共に、15 回の授業の内、5 回を事前学習、5 回をフィールドワーク、4 回を事後学習に充て、最後の 1 回は総括として授業内容の振り返りとリフレクションの時間に充てた。フィールドワークでは、原則グループで授業時間外の時間も使って自由に活動してもらったが、全員で現地に行く機会を一度設けた。

篠栗町と連携した A クラスは、2 グループで活動し、学年が偏らないように配慮した。事前学習では福祉課職員と社会福祉協議会職員から、町の概要やテーマに関する取組について話を聞いたり、「協働の街づくり事業補助制度」についてまちづくり課職員とその制度を利用する校区まちづくり協議会の方からオンラインで話を聞いたりした。クラス全員でのフィールドワークでは、健康づくりに関わる町の施設を見学した後に、介護予防に関心の高いスポーツジムの営む事業者や、過疎が

進む山間部の民生委員から話を聞いた。

この他、授業時間外で地域活動に参加できる機会として、子ども食堂や介護支援ボランティアを行う活動への参加を促し、結果として子ども食堂で2回に渡り延べ4名の学生が活動した。

各グループは、これらの活動を踏まえて、自らヒアリングや対面式アンケートを企画・実行した。

朝活PJと連携したBクラスでは、年代別に、中・高生を中心とする10代を対象とするグループ、大学生を中心とする20代を対象とするグループ、子育て世代を対象とするグループ、高齢者を対象とするグループの4グループに分かれて活動した。

事前学習では、西日本新聞社職員から朝活PJの趣旨や活動について、株式会社明治の栄養士から企業による食育の取組や朝食の重要性について話を聞いた。クラス全員でのフィールドワークでは、古賀市のインキュベーション施設で古賀市健康介護課職員から朝活PJにおける市の取組や健康維持の社会的意義などについてお話を聞いた。

各グループは、これらの活動を踏まえて、さらに、古賀市内の中学生にオンラインで話を聞いたり、大学生にSNSを使ってアンケートをとったり、子どもと大人の両面から先行研究を調べたり、食生活改善推進委員に話を聞くなどした。

この他、授業時間外で地域活動に参加できる機会として、朝活PJが主催する大型ショッピングモール内で3日間行われたイベントで朝食摂取についての調査を行い、延べ13名が参加した。



図4 Aクラス調査の様子



図5 Bクラス講話の様子

## 4.2 成果とコミュニティ・エンゲージメント

最終成果について、Aクラス、Bクラス共に学内発表の後に、地域での発表の機会を設けた。地域での発表について、Aクラスは2グループ共に発表したのに対し、Bクラスは4グループで学内評価が最も高かった1グループが、市長へ向けて発表することとした。

発表は、グループごとに行い、スライドを使った10分間のプレゼンテーション形式で行った。発表内容には①背景、②調査の目的、③結果/解決策の根拠、④解決策、⑤感想の5項目も盛り込むよう事前に指示をだした。

学内発表の際には、大学教職員にも広く参加を呼びかけ評価に加わってもらい、Aクラスには大学教職員が延べ9名、Bクラスには学朝活PJに関わる関係者および大学職員が延べ13名参加した。

評価方法は、「地域創生論」と同様に①論理性、②具体性、③独創性の3項目について各5点満点で行ってもらい、その場で集計結果を提示した。

学生は、学内発表で出された指摘を修正し、地域での発表に臨んだ。Aクラスは副町長を含むこの授業に関わった地域関係者が延べ23名参加し、活発な質疑応答がなされた。Bクラスは高齢者を対象にしたグループが市長に向けて発表し、実現可能性について活発な意見交換がなされた。全グループの発表のタイトルは以下の通りである。

### 【Aクラス】

「食べる喜び作る楽しみ」

「男性の参加率を上げる」

### 【Bクラス】

「10代の朝食について」

「食品ロス問題解消から生まれる大学生の朝食習慣」

「親が子につなぐ朝食習慣」

「高齢者の朝食に活力を」





図 6 学内報告会の様子



図 7 Aクラス地域発表



図 8 Bクラス地域発表

#### 4.3 学習効果の現状

学生の学習効果に関して観察された様子として、Aクラス、Bクラス共に、自らの成果を実際に関係者や地域の方々、学内関係者に向けて発表する機会を設けたことによって、緊張感をもって最後までやり抜こうとする様子がうかがえた。

Aクラスでは、子ども食堂に参加した学生が驚きをもって地域の実情に対する理解を深める様子がみられた。さらに、子ども食堂で運営に携わる高齢者から「配偶者が亡くなった際に食欲がなかったが、ここ（子ども食堂）に来ると食べられるようになった」という話を聞いた学生が、他のメンバーにもその様子を伝え、やりがいや人との交流が介護予防にもつながるという着想を得て、提案へとつなげていく様子もみられた。

Bクラスでは、対象とする年代によって同じ朝食であっても背景にある課題が異なることから、課題の絞り込みに時間を要しており、スケジュール管理を難しくしていた。加えて、事前学習を基に、ある程度の仮説をもってヒアリング等に臨んだが、想定していた課題が調査で明らかとなった事実と大きく異なる場合もあり、「地域創生論」に比べて、実情に沿って課題を捉えることの難しさを学ぶ様子がみられた。

その他、大学生の経済的課題とフードロス問題を掛け合わせ、廃棄されるパンを大学生に提供する仕組みの提案や、高齢者が地元食材を使いながら朝食を作って振舞うことでやりがいや交流の創出と朝食摂取の両立が図れるという提案がなされた。事前学習の際に、課題と課題を掛け合わせることで解決につながる可能性に学んでおり、その学びとの関連性がうかがえる提案内容だった。

実践による提案内容の検証をもって解決策を提案しようとするグループもあったが、時間が足りず断念していた一方で、実際に提案した内容を実施してみたいという意見も聞かれた。

#### 5. 考察

これらサービス・ラーニングに基づく2つの科目の実践の整理から、改めて、コミュニティ・エンゲージメントを含む授業設計、学生の学習効果、コーディネーションについて現状と課題について考察する。

##### 5.1 コミュニティ・エンゲージメントを含む授業設計

まず、地域パートナーの協力によりフィールドワークの機会の充足を図れたこと、そして、組織や分野の異なる学内外の関係者が複数名授業に関わる場の創出ができたことは、一定の成果と言えるだろう。しかし、半期（約4か月）の授業内で、実証を伴うような提案の検討は時間的制約も大きい。課題の整理から解決策の提案までを行う授業設計が、学習効果において適切であったかどうかについては検討する必要がある。

一般に、継続した授業運営と学習効果の向上にコミュニティ・エンゲージメントは必須条件である。しかし、地域パートナーとの関係構築には時間と手間を要するため、半期の授業であっても、授業実施期間以外にもコミュニケーションを図ることが必要となり、担当教員の負担は少なくない。円滑な授業運営のため、「地域創生PBL」では学生クラス・サポーター、Bクラスに教員1名が支援

に充てられたが、授業設計に対して適切な配置になっていたかどうかについても、検討が必要である。

## 5.2 学生の学習効果

次に、学生の学習効果について学習意欲の向上や地域社会の実情に対する理解を深める様子が一定程度観察された。そして、実社会における複雑な課題と向き合い、課題の整理や根拠をもって解決策を提案することで、論理的思考や批判的思考に対する一定の成長もみられた。

しかし、これら学生の学習効果は、客観的な指標を用いて評価するには至っておらず根拠に乏しい。今後、より客観的な成果の検証が課題である。

さらに、開講1年目の科目であったため、結果的に授業設計およびその運営に力点が置かれ、サービス・ラーニングが重視するリフレクションを適切な内容とタイミングで実施することが不十分だったため、実践を十分に学びに変えられなかった可能性もある。学習効果の検証と併せて、検討の余地が残る。

## 5.3 コーディネーション

最後に、コミュニティ・エンゲージメントを含む授業設計や学習効果の向上を可能とするコーディネーションについて、同大学内にある関連部局（社会連携センター、教育開発推進室）が、地域パートナーを中心とする学内外のつなぎ役や運営サポートを担った。さらに、前身となる科目の担当者がサポート教員として入ることにより、それまでに培われた地域との関係を基礎に授業を実施することが可能となった。

しかし、地域パートナーと大学とが互恵的な関係を築くには、適切な関係へと導くことができる専門性を伴ったコーディネーションが必要となる。この意味において、サービス・ラーニングを基礎とする継続した授業運営には、担当教員だけでなく、大学および地域側のコーディネーション機能を高めていくことが必要となるだろう。

## 参考文献

- 1) Furco, Andrew: Service-learning -A balanced approach to experiential education expanding boundaries. *Serving and Learning* 1, pp.1-6, 1996.
- 2) Jacoby, Barbara: Service-Learning in Today's Higher Education, B. Jacoby & Associates (Eds.) *Service-Learning in Higher Education: Concepts and Practices*, San Francisco CA: Jossey-Bass, pp.3-25, 1996. (=山田一隆(訳), 翻訳こんにちの高等教育におけるサービスラーニング, 龍谷大学経済学論集, 第47号第1/2号, pp.43-61, 2007.)
- 3) Cress, Christine M., Stokamer, Stephanie T., Kaufman, Joyce P.: *Community Partner Guide To Campus Collaborations- Enhance Your Community by Becoming a Co-Educator with colleges and universities*, 2015.
- 4) 坂本文子: 日本のサービス・ラーニングの効果と課題-宇都宮大学「地域プロジェクト演習」における学生, 教員, 地域パートナーに着目して-, 日本福祉教育・ボランティア学習学会研究起用, Vol.34, pp.5-18, 2020.